

2024年5月8日・10日 水曜祈り会・金曜集会

吉田真司

本日の学び：「ひとつの霊、多くの働き」 テキスト：第一コリント12章1-11節（参照:12章12-31節）

【理解の手がかりとして】

12章1～11節は「霊的な賜物」に関する箇所。「霊的」とは、神の霊、すなわち「聖霊の賜物」である。4節に「賜物はいろいろあります」とあり、8節以下で「知恵の言葉」「知識の言葉」「信仰」「病気をいやす力」「奇跡を行う力」「預言する力」「霊を見分ける力」

「異言を語る力」「異言を解釈する力」とその諸々の賜物が列記されている。では聖霊の賜物とはこの限りなのか、と言うと、そうではなく、パウロがここで言いたいのは「聖霊の賜物とは、それほど多種多様なのだ」ということである。

と言うのは、当時のコリント教会内にて、聖霊の賜物に関する混乱が起こっていたからである。これまで学んできたように、この教会にはいくつかの党派、グループが生まれて対立し合っていた。それは、それぞれの党派が、自分たちに与えられている賜物を誇り合うようになっていたということ。パウロはこの党派争いの根本に、自分を誇るうとする思いがあることを見つめて、「誇る者は主を誇れ」（1:31）と語ったのであった。

そしてまたこの教会内に、コリント異教世界の忘我的調子を帯びた熱烈な性格が強い影響を与えていた点がある。2節にはコリント教会信徒のかつての異教経験が記される。「誘われるまま」「連れて行かれた」とは、忘我の状態を指すものである。そして彼らはその興奮の中に神を見る、と誤解した。コリント教会内においても、そのような忘我体験の中に「霊的」を感じた人々が、そうでない人々に対して、「あなたには聖霊の賜物がない!」などに見下していたのであろう。

もう一つ、驚くことに教会内に「イエスは神から見捨てられよ」（12:3）と言い出す信徒がいたということ。もはやそれではキリスト者とは言えないではないか、と思うが、ここには当時のグノーシス派の思想がある。彼らは「歴史的人間イエス」と「天的な霊であるキリスト」とを厳しく区別し、前者を否定し、後者をことさら重んじていたのである（「イエス」と「キリスト」の使い分けに注意!）。

この「イエスは神から見捨てられよ」とは、十字架刑を指す。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マルコ15:34）は十字架上の主の言葉。グノーシス派は「十字架の死の直前にキリストの霊がイエスの体から離れた」と説き、十字架によるキリストの苦しみを否定していたのである。

3節でパウロは、そのグノーシス派に対して厳しい態度で臨んでいる。「イエスは主である」とは、「史的イエスは主である」あるいは「十字架で死したイエスは主（※）である」という、まさにグノーシスが主張するキリスト論とは真逆の信仰告白なのである。※この「主」というのはギリシャ語の「キュリオス」で、これは大変な言葉であった。それはローマ皇帝の正式な称号であり、迫害者たちは常に「皇帝は主（キュリオス）である、と言え」と強要したのである。

ともあれ、この箇所におけるパウロの強調点は、「イエスは主である」と告白に導かれた者はすべて聖霊の導きを受けた者たちであり、したがって「聖霊の賜物」を巡って教会内で相互に優劣をつけたり、排斥し合うなどあってはならぬ、ということである。パウロはとにかく教会内の分裂ではなく一致を願っている。「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです」（12:7）がその心の最も良く表されている一節であろう。聖霊の賜物、聖霊の働きの現れは、人間の認識が制限できるものではない。それは人知を超えたはるかに自由なものである。しかしその霊性の是非を問う時に、私たちは「教会全体の益となるため」という観点を忘れてはならない。

さて、ここまでが本課のテキストであるが、以下に12-31節までの部分も釈義しておこう。それはそれに続く次課（13章の学び）への橋渡しとなるからである。

12-31節は「キリストの体」なる教会についてである。「体」はギリシャ語で「ソーマ」というが、この言葉をパウロは、彼の手紙の中で実に66回も使っている。これは、「体」という言葉が、パウロにとって非常に重要な意味を持っていた、ということの意味している。パウロはまず「体は一つでも、多くの部分から成り」（12節a）と語り、さらに「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています」（14節）と強調している。私たちの体は手や足、目や耳などの多くの部分から成り立っているから、これは誰にでもよく分かるたとえ。

パウロは14節以降から、手や足、耳や目、鼻といった具体的な部分を示して、「体」の有り様について説明していく。16節にはこうある。「耳が、『わたしは目ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか」と。当時のコリント教会内の分派争い（分裂状況）が実に見事にたとえられている。スイスの新約神学者E.Schweizerは「体全体が目だけの、あるいは耳だけの巨大な生き物を想像してみてください。そんなグロテスクなものはないでしょう。しかし、もしも教会の中で、ある一部分の人だけが自己主張をして、それを押し通そうとしたり、その人たちだけが大切にされたりしていたら、それは同じくらいグロテスクなことです」という風に語っている。なるほど、その通りである。

12章26節は有名である。「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです」。ここに、互いの喜びを自分の喜びとし、互いの悲しみを自分の悲しみとする、そういう教会のあるべき姿が語られている。28節以降、教会内の数多くの働きが列記される。その後半部分に「次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者」等々、「・・・の者」と訳されているが、これは原典ではむしろ「・・・の賜物」と訳した方が適切のようである。ここでパウロが言いたいのは、その人間自身についてではなく、その賜物について。そしてその賜物が用いられ、相互に尊重し、担い合われる所に、キリストの体になるのである。私たちはついつい「誰が」ということに意識が行くが、「何が」ということを大切にしたいのである。パウロは31節でこう締めくくっている。「あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい」と。

『聖書教育』より

- 「私たちに与えられている『賜物』について考えてみましょう。・・・私たちは、神の前に謙虚にされ、神に支えていただきたきながら、互いの賜物を認め合い、力を合わせて教会形成に励むことができます。」（大人クラス）